

市川伸一先生インタビュー  
第2弾

特

集

見つめ直そう！

# 「評価」と「支援」

単元テストをどう評価に生かし、支援していくのか…

◆適切な評価と支援のサイクルとは!?

◆評価テストに見出す新しい価値とは!?

新学期を迎えるいま、「評価」と「支援」をもう一度見つめ直してみたいと思います。



## 市川 伸一 (Shinichi Ichikawa) プロフィール

1953年生まれ。77年東京大学文学部卒業。80年同大学院人文科学研究科博士課程中退（心理学専攻）。

88年文学博士。埼玉大学、東京工業大学を経て、94年より東京大学助教授。99年より現職。

### <所属学会・役職等>

日本心理学会、日本教育心理学会、日本認知心理学会、日本認知科学会、日本行動計量学会、日本教育工学会、

日本心理学諸学会連合副理事長（同心理学検定局長）、

日本心理学会評議員、日本教育心理学会理事

地域の学び推進機構会長

※地域の学び推進機構…地域の子どもたちを対象とした教育

プログラムの活性化をはかるために設立された市民団体。

文京区・杉並区・江東区・台東区・足立区などで展開中。

[URL] <http://www.chiiki-manabi.org/>

## 評価テストの役割

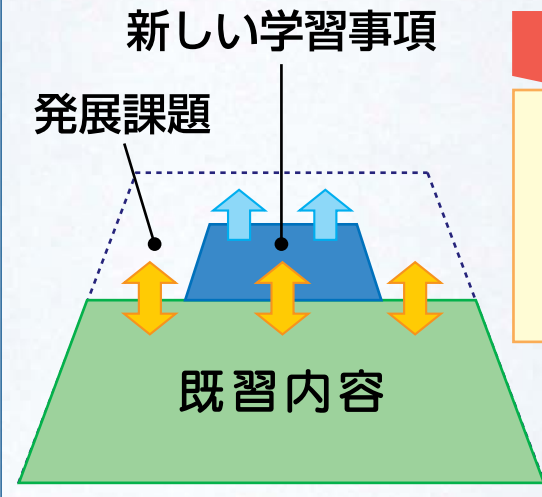
評価にも色々な形態があります。その中でも、テストの形になっている評価というのは、学習改善に生かす情報を得るためのツールだと思っます。それは先生にとってみれば授業の改善にもつながります。

テストのなかには、選抜のためのものや学力実態調査といったものもありますが、それは副次的なものと考えています。

## 評価テストを「生かす」という考え方

テストをすると「結果」が知らされますが、次のアクションにつながっていないのが現状です。もっとテストから見取れる情報を大切にすべきだと思います。予備校のテストなどではコメントが出ますが、領域別の得点しか出てきません。すると、関数が苦手と診断された子でも、関数の勉強をどうすれば良いのか指針がわかりません。「学習方法」や「プロセス」の改善に結びつけることができるテストが必要だと思います。

例えば「計算が遅い」子だとしても、それは単純に計算が遅いだけなのか、工夫して計算できていないのか、そのプロセスに着目する必要があると思います。それによって解決させる方法が違ってきます。そこでとる勉強の方法が効果的なものでなければ、根本的な解決は望めません。ペーパーテストの限界もありますが、どういう点を補強すればよいのかを示す体力診断テストに相当するような、分析的なテストが必要だと思います。



授業の流れ

- 教師からの説明
- 理解の確認
- 発展課題
- 自己評価活動

評価と支援のサイクル

インタビュー  
2弾

普段の授業の習得サイクル型の学習（注）でも色々な授業形態がありますが、わたしは「教えて考えさせる」授業が一つの基本的な型だと考えています。その型に則って考えるならば、まず予習なり先生の説明なりで外から情報を示します。これが「教える」という場面です。

しかし、どれだけ理解できたかチェックする活動を行うことが必要です。これが「考えさせる」の第1ステップです。たとえば、「人にきちんと説明できるかどうか」を目安に、説明活動や教え合い活動を入れます。ここで、先生からの「支援」とは、できる限りの指導技術を使って、お手本となるわかりやすい説明をすることにあたります。子ども同士での支援として、教え合い活動があるわけです。

こうして、共通の知識の基盤をつくってから、第2ステップの「考えさせる」にあたる問題解決的な発展課題に入ります。ここまでくるとわからなくなる児童がでてくると思います。しかし、考えさせることが目的なので、ヒントを与える程度の支援に留めます。ヒントカードを使う場合もあります。ただし、一人ひとりに対応するのは大変ですので、グループごとで考えさせた上で、グループとして質問に来させ、その質問に対するヒント

カードを出す形式にするとうまくいくでしょう。その上で、クラス全体の討論も行います。

第3ステップの「考えさせる」活動は、わかったこととわからないことを自分の言葉でまとめることです。あるいは、先生に対する「質問カード」を用意して、そこに書かせて回収し、次の時間にはそのフォローをします。これも、先生からの支援ということになりますね。

単元の最後にテストをするだけではなくて、途中こそテストを入れるといいと思います。もし習熟度別にするなら、ここで分けると良いと考えます。「習熟度別」というよりは、テストで診断された「つまずきタイプ別」のグループ分けと考えた方が良いでしょう。つまずきを克服したら最後はまた合流して皆で考える課題に取り組んで、その単元を終了させます。単元の途中で評価テストをやることによって、その結果を生かした授業ができると思います。それができてこそ「指導と評価の一体化」と言えます。

もし、テストを単元終了時のみに行うのであれば、そのフォローは課外授業を使って行うといいでしょう。それが時間的に厳しければ、その単元の関連単元を学習する際に、既習事項が身に付いていなかった児童には手厚く復習を行ったり、そ

こでつまずきタイプ別授業を行うなど、なんらかの手立てを施すことが考えられます。そうすれば子どもたちも一体何のために復習をしているのかわかりやすいので、効果的だと思います。

## 評価テストの新しい捉え方

評価というのは先生にとっても子どもにとっても、最後にやっけて、がっかりしたり喜んだりするものになってしまいがちです。しかし、評価は学習改善に生かしてこそ価値があります。学習の途中の評価を大切にして、先生方には、評価したらそれをどう指導に生かしたらよいかを考えて欲しいと思います。そうすれば子ども自身も、評価されること自体が自分の役に立っていると実感できるようになると思います。

子どもは普通テストを嫌がりますが、どこが悪かったかわかり、それを克服するための手立て

になるのだということがわかれば、むしろテストを受けたほうが自分の得になると考えるようになるのではないのでしょうか。例えば、スポーツでも強くなりたいなら体力診断テストを受けて細かいアドバイスをもらいたいと思うはずですよ。

これから、子どもたちには「テストは自分の学習に生かすものだ」という気持ちを持ってもらいたいので、そう思えるように先生には働きかけて欲しいと思います。途中の評価は悪くてもいい。むしろ、どこが悪いかを探ることが大事な目的であること、悪かった点はこういう手立てをすればよくなるという姿勢を先生から示して欲しいと思います。

最後に、学習とは「どれだけ知識が定着したか」というだけではつまらないと思います。できれば、子どもに「教えてもらったことがこう生かされた」と感じさせたいものです。間違いを指摘され、教えてもらい、正しい知識を身に付けるのは、ワンステップです。その先はもっと発展的な課題があり、さらに他教科や生活にもつながっていくものです。トータルで見たとときのよい学びの姿を学校で作って欲しいと強く願います。

(注) 習得サイクル型の学習

学校の学習には、既存の知識や技能を身に付ける「習得サイクル」と、自ら興味を持ったテーマを追究する「探究サイクル」の二つがある。教科の学習は、「予習で概略をつかみ疑問点を明らかにして授業に臨む」「授業で理解を深める」「復習で定着をはかる」という習得サイクルの中で進められることが多い。「教えて考えさせる授業」は、いきなり授業のはじめに問題を提示して自力発見や協同解決をさせるのではなく、予習や塾での先取り学習による予備知識の差を補完し、多くの子どもが問題解決や討論に参加できる授業形態として提唱されているものである。

